

豊後国速見郡由布院の村落構造 三 家族構成

著者	川口, 恭子
雑誌名	熊本史学
巻	23
ページ	16-20
発行年	1962-07-20
URL	http://hdl.handle.net/2298/2710

三 家族構成

ここでは速見郡のうち並柳村、畑村、石丸村の三カ村の家族構成について「豊後国速見郡由布院御検地帳」⁽¹⁾、「豊後国速見郡由布院人付帳」⁽²⁾、「豊後国由布院江戸御料所分人畜改帳」⁽³⁾によつて考察したい。この三カ村は元和元年の検地帳の田方、畠方共にあり、慶長十六年、元和八年の人畜改帳が現存しているものである。並柳村、畑村、石丸村の田畠の比率は検地帳によれば図表Ⅰの如くである。並柳村は田がすこし多い程度であまり大きな差はない。畑村は畠が多く、石

川 口 恭 子

丸村は田が多い。

慶長十六年の人畜改帳によれば三カ村五〇戸の総人口数は四二〇人で一戸当り平均八・四人であり、元和八年では戸数は変わらず、総人口四八九人、一戸平均九・七人に増加している。各村については図表Ⅰの如くで、石丸村が多いのは惣庄屋次郎右衛門家の血縁家族以外に非血縁の名子、下人等をふくむ六一人という龐大な家族があるからで、それ以外の戸の平均は八・八八人である。一戸当りの人

図表Ⅱ

	村名	総人口数	戸数	一戸平均人数
慶長16	並柳村	123	16	7.68
	畑村	69	11	6.27
	石丸村	228	23	9.91
元和8	並柳村	148	15	9.86
	畑村	94	13	7.23
	石丸村	247	22	11.22

家族の多い家は慶長十六年二人の家族をもち、元和八年には三〇人を有する庄屋三郎右衛門家で、血縁家族九人、非血縁のもの名子

五、下人五、下女七、その他四、計二人の隷属農民をもっている。畑村の場合をみると、慶長十六年では一戸当り四〜八人としており戸当りの人数が平均しているが、元和八年では一〇人以上をもつ家が三戸ある。これは本百姓三郎の一人、肝煎新兵衛の一〇人、庄屋角介の二人である。石丸村の場合は慶

図表Ⅰ

並柳村	田畠計	22町18畧	6反8畧	2畝2畧	7畧3畧	54%46
		41	4	4	11	100
畑村	田畠計	10畧16畧	4畧2畧	5畧0畧	23畧23畧	3961
		26	6	6	16畧	100
石丸村	田畠計	31畧7畧	2畧9畧	2畧5畧	15畧28畧	7723
		39	1	8	13	100

図表Ⅲ

並柳村				畑村				石丸村			
総戸数	本百姓	その他		総戸数	本百姓	その他		総戸数	本百姓	その他	
慶16元8	慶16元8	慶16元8	慶16元8	慶16元8	慶16元8	慶16元8	慶16元8	慶16元8	慶16元8	慶16元8	慶16元8
1											
2	1	1						1	5	3	1
3	1	1	1					3	2	1	1
4	1	1		3	2	2		2	3	2	
5	1	1		2	2	1		2	2	1	
6	4	1	4	2	2	3		2	2	3	1
7	1	3	1	3	2	1		4	2	1	
8	1	3	1	3	2	1	1	2	1	1	
9	1	1	1	3	2	1		2	1	1	
10	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1
11				1	1	1		2	2	2	
12								2	2	2	
13	1	1	1					2	2	2	
14								2	2	2	
15		2	1					2	2	2	
16								1	1	1	
17											
18											
21	1										
30		1									
38								1		1	
61								1	1	1	1

図表Ⅳ

家族人数	並柳村		畑 村		石丸村	
	慶16	元 8	慶16	元 8	慶16	元 8
1	2				1	
2	3				2	
3	2				4	
4	7		4		4	
5	1		5		5	
6	1		1		2	
7					2	
8					1	
9					1	
10						
16						1

長十六年には四十六人家族は六戸で、全戸数の四分の一をしめる。七人以上の構成員数をもつ家が多く存在する。元和八年には五人以下の家族が十一戸にふえ、七人以上の家は慶長十六年に比べると五戸減少している。元和八年に二―三人家族が六戸出て来ているが、これは本百姓新二郎の家族員減少のほかは元和八年の人畜改帳にはじめてあらわれたものであり、興禪院同宿宗円の外は皆名子の独立したものである。慶長十六年に三八人家族で元和八年には六一人家族に増加したのは惣庄屋次郎右衛門家で、慶長十六年では血縁家族数は九人でこれが元和八年には十六人となり、非血縁の隸属農民数も二十八から四五人に増加している。血縁家族数が七人ふえているが、これは慶長十六年には有配偶組数が惣庄屋夫婦、息子夫婦の二組であつたものが、元和八年では惣庄屋次郎右衛門夫婦、子理介夫婦、子久太郎夫婦、理介の子孫吉夫婦と血縁家族内での有配偶組数が四組になつたためである。非血縁者の一七人増は名子四、下人三、下女三、その他名子下人の女房子等七人の増加によるものである。

次に家族数の問題を血縁家族だけについてみよう。血縁家族員数別戸数は図表Ⅳである。並柳村の場合は慶長十六年では四人家族が七戸で最も多く、四人以下の家族で構成されるものが全戸数の八七

%である。元和八年でもやはり四人家族が六戸で最も多く、三―五人家族で八〇%をしめる。ここでは一―二人家族はみられず、かえつて七、九人家族がみられる。七人家族は庄屋弟吉兵衛家であり、九人家族は庄屋三郎右衛門家である。これらは一家族内に戸主夫婦のほか、親夫婦、弟夫婦、子などをもつてゐる。慶長十六年に一―二人家族であつたものは元和八年の人畜改帳にはみられない。畑村の場合は慶長十六年では二―三人家族が全戸数の八一%をしめるが元和八年では二―三人家族は減り四―五人家族が多くなつてゐる。それ以上の構成員数をもつ家はみられない。石丸村では慶長十六年には四人家族が十戸で全体の四一%をしめてゐる。三人以下の家族は一戸しかみられず五人以上のものが五四%をしめてゐる。元和八年において一六人の家族数をもつ家は、惣庄屋次郎右衛門家であつて、これは前に述べたように四組の配偶者とその他子、孫によつて構成されてゐる。以上みてくると一戸当りの血縁家族員数は三―五人位の小家族が一般的であつたことが窺われる。

次に農業経営の労働力としてかくことの出来ない非血縁の隸属農民である名子、下人についてみると、人畜改帳によれば本(頭)百姓はその家族の中にこれらの名子、下人、下女等をもつており、名子と下人は区別され、下人は慶長十四年には荒し子、同十六年には小者、元和八年には下人と記載されている。村別の名子下人数は図表Ⅴで、これらの本百姓に対する割合は並柳村、石丸村が多く、畑村は少い。並柳村では慶長十六年には名子と下人では下人が多いが、元和八年では逆になつており、畑村は下人が少く、石丸村では下人が多く存在する。一戸内の名子、下人数をみると図表Ⅵの如くで、名子は一戸当り一―二人がほとんどである。並柳村では元和八年に

図 表 V

	並柳村 慶16元8	畑 村 慶16元8	石丸村 慶16元8
本百姓	9	13	11
名子	10	24	11
下人	23	14	9
名子, 下人の 対本百姓比	3.66	2.92	1.81
名子の対本百姓比	1.11	1.84	1.00
下人の対本百姓比	2.55	1.07	0.81

図 表 VI

名一戸 子戸内	並柳村 慶16元8	畑 村 慶16元8	石丸村 慶16元8	外一戸 人数内	並柳村 慶16元8	畑 村 慶16元8	石丸村 慶16元8
1	6	4	5	1	5	6	9
2	2	3	1	2	4	1	1
3		1	1	3			1
4				4		1	4
5	2			5	2		1
6			1	6	1		
7				7			
8				8			1
9				9			
10			1	10			
11				11			1

図 表 VII

	本百姓	その他	家族平均	縁族平均	非家族平均	縁族平均	名子平均	下人平均	人数
30反以上		2	29.5	8	21.5	4	6.5		
20反以上	3	1	13.2	4.2	9	1.7	3.2		
10反以上	10	1	8.6	3.8	4.8	1.4	1.2		
5反以上	12		7.1	4.7	2.4	0.75	0.58		
5反未満	9	2	6.5	4.1	2.4	0.54	0.63		

五人をもつ戸が二戸あるがこれは庄屋三郎右衛門家と本百姓清左衛門家で清左衛門は一町六反六畝十六歩半の持高である。慶長十六年に六人をもつ石丸村の惣庄屋次郎右衛門は元和八年には一〇人の名子をもっている。下人は一戸内一人が多い。並柳村では一し二人をもつのは本百姓で五人をもつ二戸は惣庄屋と庄屋である。畑村では

人畜改帳では村内で見出すことは出来ない。
石丸村ではやはり一戸内一人がもつとも多いが、二し五人までをもつ家がそれぞれ存在する。元和八年に一人をもつのは惣庄屋である。並柳村で五人をもつ三郎右衛門、石丸村で一人をもつ次郎右衛門等、多くの名子下人をもつものは皆、庄屋、惣庄屋である。

慶長十六年に一戸内一人が九戸あるが元和八年では下人をもつ戸は四戸にへつている。慶長十六年には九人であつた下人が元和八年では六人にへり、このへつた下人は元和八年の

本百姓の持高によつて家族及び名子、下人についてみたのが図表Ⅶである。三〇反以上をもつものは石丸村惣庄屋次郎右衛門と並柳村庄屋五介である。三〇反以上と二〇反以上、一〇反以下との間には大きな差がみられる。持高の多いもの程家族数―血縁家族数も非血縁家族数も―も多く、持高がすくなくなるにつれて家族数、名子、下人数もすくなくなっている。

註(1)「豊後国速見郡由布院御檢地帳」石丸村田方、畑村畠方、

並柳村畠方は熊本大学図書館蔵。石丸村畠方、畑村田方、並柳村田方は九州大学九州文化研究所蔵。

(2) 熊本大学図書館蔵。

(3) 右同。

(4) 慶長十六年では十四人、二十一人をもつ戸があるが、これは惣庄屋甚左衛門の十四人と庄屋五介の二十一人で、人畜改帳の記載様式では同一家族に含まれるようであるが、総計のところで惣庄屋、庄屋と別に取扱つてあるので、ここでは別にした。